

# 琉球大学学術リポジトリ

## 《音楽科》「個」の音楽理解を深める授業づくり： 協調学習による対話を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2016-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 園美, 小川, 由美, 岡田, 恵美, Kinjo, Sonomi, Ogawa, Yumi, Okada, Emi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/35348">http://hdl.handle.net/20.500.12000/35348</a>

## 「個」の音楽理解を深める授業づくり

### — 協調学習による対話を通して —

金城園美\* 小川由美\*\* 岡田恵美\*\*

\*琉球大学教育学部附属中学校 \*\*琉球大学教育学部

#### I 主題設定の理由

現在、日本の学校教育では、「21世紀型能力」の育成が求められている。この「21世紀型能力」には、現代社会において生じる未知の問題、つまりこれまでのようなやり方を踏襲するだけでは解決し得ないような問題に対して、答えを出すための「思考力」や、多様な価値観をもつ他者との対話を通して、現実の問題を解決していくような「実践力」が含まれている<sup>(1)</sup>。特に「思考力」は、この「21世紀型能力」の中核にあるとされている。ここで言う「思考力」とは、自分の考えを持って他者と話し合い、自らの考えを比較吟味し統合してより良い解や、新しい知識を身につけ次の問いを身につける力でもある、とされている<sup>(2)</sup>。このような「思考力」や「実践力」を含む「21世紀型能力」のような、学校教育の中で育成することが求められている資質や能力を獲得させていくためには、これまでの画一的で知識詰め込み的な教育から、「自ら学び、自ら考える力」を育成する「個」を重視した教育への転換が図られるようになってきた<sup>(3)</sup>。では「個」を重視する学習を展開するためには、どのような学習活動が良いのか。

#### 1 対話を通してはぐくまれる資質・能力

##### (1) 対話を通してはぐくまれる資質・能力

対話は、「21世紀型能力」の育成を図るために最も重要なキーワードのひとつである。ここでの対話は、「他者の声を聴く関係性」を基に、双方向に互いを理解しようとするコミュニケーションと言える<sup>(4)</sup>。

対話のある学びでは、従来のように、教室で教師が教えたことを教えたとおりにできればよいのではなく、

将来、学んだことを土台に次の学びを積み上げて発展させることができるような学びとなることが期待できる。そして、このような学びでは、自分で言うべきことを考えて他者に説明して伝えるコミュニケーション能力や、他者と話し合っ自分の考えを深めるコラボレーション能力、これまでの知識や他者のアイデアを様々に組み合わせて新たな見方を創造していくイノベーション能力などの、「21世紀型能力」が育成されると考えられる<sup>(5)</sup>。

対話を成立させるためには、お互いの考えを認め合う支持的風土が必要であり、さらに生徒同士で意見を共有し思考していくというプロセスが大切である。そして、このようなプロセスを経ることで、生徒の成長を促せると考える。

では、この対話を通して、本校での取り組みでは、生徒にどのような資質・能力が育成されてきているだろうか。本校が取り組んでいる協調学習の中の対話を通して、「主体的な学び」と「深い理解」の2つがはぐくまれてきているのではないかと考える。知識構成型ジグソー法の「建設的相互作用」の原理に基づき、今日はよくわからなかったけど、考えることが楽しかったと思ってくれる生徒が増えれば、自ずと主体的な学びに向かうことが予想されるとしている。そこで、「建設的相互作用」が起きるような授業づくりを行うことによって、「主体的な学び」を創造できるのではと考えられてきた。また、「深い理解」とは、複数の視点からの思考を促す課題を通して、対象内容の中身を自分の言葉で他者に説明できる状態、或いは教師の意図する姿が見取れる状態を指している<sup>(6)</sup>。

## (2) 資質・能力をはぐくむための学習過程

本研究では、「主体的な学び」や「深い理解」という資質・能力をはぐくむ対話を活性化させる方法として、協調学習を取り入れる。協調学習では、生徒一人ひとりの「個」を大切にしながら、主体的に課題にかかわる学習となるように、教師が課題解決の糸口となる複数の観点を設定する。生徒は、複数の観点のうち、一つの観点について学習していく。最終的には個々の知識構成に役立っていけるようなプロセスを展開する。そのプロセスとは、①教師が課題を提示・共有する、②生徒は各観点に関するプロになる（エキスパート活動）、③各エキスパート同士で小集団を編成し、相互の対話を通して課題解決の糸口を見つけていく（ジグソー活動）、④最終的に全体で共有することで、解に繋がり、深い理解へと結びつけていく（クロストーク）という一連の学習過程のことである。

## 2 音楽科授業ではぐくむ「個」の音楽理解

### (1) 音楽科の鑑賞領域で育てる力

では、音楽科では具体的にどのような資質・能力をはぐくむのか。まず、音楽科では音楽を形づくっている要素を知覚（音楽の要素や構造を、感覚器官を通してとらえること）・感受（音楽の要素や構造によってもたらされる音楽の雰囲気を感じ取ること）ができるようになることが、生徒が生涯のうちに出会う多様な音楽を理解するための重要な窓口となっていく。音楽の諸要素の視点から、我が国や諸外国の様々な音楽の特徴をとらえること、つまり音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受することは、すべての音楽活動を支える最も基礎的な力である。『中学校学習指導要領解説音楽編』では、知覚・感受する基礎的な力を表現、鑑賞の全ての領域で展開していくことが生涯にわたって楽しく音楽活動ができるための基になる能力だと謳っている。

そして、生徒自身が、音楽を形づくっている要素を知覚・感受し、その音楽を価値づけ理解していく（批評）プロセスの中で思考は働く。批評というのは、「音楽のよさや美しさなどについて、言葉で表現し他者に伝える」行為のことである。つまり鑑賞領域における批評行為では、自分が感じたその音楽の「よさや美しさ」といった、その音楽に対する自分なりの価値判断を、他者に理解してもらうために「客観的な理由を基に」伝える行為が含まれる。そして、この「客観的な

理由」つまり音楽的な「根拠」をもって批評する時に、対象となる音楽が「自分にとってどのような価値があるのかといった評価」をする必要があり、この評価をしていく際に思考が働くのである<sup>(7)</sup>。

### (2) 対話を通してはぐくむ「個」の音楽理解

音楽の諸要素を知覚・感受する力を基礎として、対象となる音楽がどのようなものであるか、そしてその音楽が自分にとってどのような価値のある音楽かを考えていくプロセスで、音楽科における思考力も深まる。そして思考が深まっていくことで「個」の音楽理解がはぐくまれると考える。

これまでの鑑賞学習をふりかえてみると、その音楽が生まれた時代背景などについて調べて分かったことや、音楽様式や形式、楽器や声などから感じたことを項目ごとに個人個人でまとめ、感想文にまとめるという展開が多かった。調べ学習を通して深化させてはいるが、どちらかというと個人で活動する内容に終わっていることが多かった。このような授業の流れの中で生徒自身の学習意欲がどこまであるのか、どのくらい知覚・感受できているのか、最終的に何が身についたのか等を模索しながら、教師は授業展開をしてきたのではないだろうか。個人で知覚・感受したことをまとめるだけでは、音楽科の鑑賞領域の学習内容を深めていくことには限界があったのではないかという反省点も見えてきた。そこで、音楽科の鑑賞において根拠をもって批評できる活動にするためにも、個々の活動にとどまらず、対話を通して、生徒自らが主体的・能動的に活動し、その音楽の良さや美しさ、特徴を味わえるように実践していきたいと考える。そして、最終的には「個」にかえることで、自分にとっての音楽理解を深めることに繋がると期待する。

## II 研究の目的

本研究では、音楽科の特質に即した協調学習のあり方を探り、対話を通して、鑑賞領域における「個」の音楽理解を深めることを目的とする。

## III 研究仮説

共通点や相違点が見出しやすい琉球（沖縄）と韓国の箏や箏曲を、「音色」に着目して比較鑑賞することで、それぞれの音色に対する知覚・感受を促すことができるだろう。そうして知覚・感受した「音色」を対話の

中核に置き、音色と各観点（「奏法」「楽器の構造」「文化的・歴史的背景」との関連を探っていくことで、2つの箏の音色が生み出される要因を探っていくような学習展開が可能となる。各観点から得られた情報を、対話を通して統合していく過程で、さらに多様な視点から2つの箏や箏曲の魅力を探っていくことが出来るようになる」と考える。

このような学習過程を経ることで、個々の音楽に対する理解を深め、その魅力や味わいを人に伝えることができるようになる」と考える。

## IV 研究内容

### 1 音楽科におけるめざす生徒像

本校では、「歌唱」「器楽」「創作」「鑑賞」の各活動分野の中で音楽のもつよさを感じながら、意欲的にかつ能動的に活動できるようになること、そして、音楽文化の多様性を理解できるようになること、音楽を通して豊かな感性が育つことをめざす生徒像としている。

本校の生徒は、音楽の持つ良さや魅力について言葉にしていくことはできる。そこで本研究では、協調学習を通して、さらにその音楽についてもっと知りたいといった、良い意味でのこだわりをもった姿が見られるように、探求心を深めていけるような学習活動をめざしたいと考える。

### 2 「個」の音楽理解をはぐくむ音楽科「鑑賞」領域の授業デザイン

#### (1) 音楽科「鑑賞」領域における協調学習

本テーマにも掲げてあるように、対話を通して、音楽科「鑑賞」の領域における「個」の音楽理解をはぐくむために、協調的に学びを深めていける授業を展開しなければならないと考える。そのために今回は、ジグソー法を用いて授業を展開する流れを作ってきた。最終的には「個」の音楽理解をめざすのだが、そのために集団の中で「個」を生かしながら、主体的に課題に取り組む。

まず音楽理解につながるような問いを提示し、その問い、つまり課題に対して解決の糸口となる複数の観点を提示する。生徒は複数の観点を最初から全て学ぶのではなく、それぞれが分担して、その一つの観点について、仲間と共に学び理解していく。そうすることで、クラスにはそれぞれの観点について学んだ仲間がいるという状況となる。そこで、自分が学んだ観点以

外について理解を深めてきた新しい仲間と共に対話を通して音楽の魅力を探り、学びを深めていくという流れを作った。

#### (2) 多様な音楽理解を促す教材選択

今回、多様な音楽理解を促す教材として東アジア、とりわけ韓国と琉球（沖縄）の箏や箏曲（箏を用いた器楽曲、及び伴奏を必要とした声楽曲）に着目した。その理由には、2つの箏の形には類似点や相違点があるが、その一方で、音楽的な雰囲気の違いがわかりやすいことが挙げられる。また、「琉球箏」は沖縄という地域に住む生徒にとって生活での接点があるものである。たとえば、「琉球箏」の音楽は、古典音楽の世界で奏でられると同時にお正月のCMやデパートなどで頻繁に流れている。そのため生徒は琉球箏の音楽から自らの生活経験を想起して色々なイメージを持つことが出来る」と考える。一方、韓国の箏曲や楽器には聴き馴染んでいないため、ある種の違和感を覚える」と考える。何より、今回取り上げた2つの箏は、似たような形状を持った楽器であるが、その音の響き（音色）には聴きただけで分かる違いがあり、その音色の違いがその国・地域らしい音楽の雰囲気を醸し出している、という特徴がある。特に2つの箏の音色の違いは、生徒にもすぐ分かる大きな違いではあるが、このような音色がどのように生み出されてきたのか、というような点において深く探っていくためには、それぞれの箏がどのような形状や構造をしているのか、どのような演奏法で奏でられているのか、また、何故このような楽器が生まれてきたのか、といった様々な事柄を探っていく必要がある。そこで、2つの箏の接点や相違点を探れるように、課題解決の観点を設定していく。そして、2つの箏を比較する際の核として、特に「音色」に焦点化していくことで、ジグソー活動における学習活動の深まりも出てくると考える。

次の項において、今回教材として選択した「琉球箏」の『瀧落管攪（沖縄方言では「たちうとうしすいががち」）』と、「伽倻箏（カヤグム）」の『沈香舞（チムヤンムー）』の特性や文化的・歴史的背景について示す。

#### ① 東アジアの箏について

箏の起源は、古代中国の秦の時代に遡る。以来、箏は、東アジアを中心に長い年月を経て、各国の音楽的性格を反映しながら楽器改良が重ねられ、各国独自の箏曲が発展してきた。箏は、中国では儒教の礼楽思想、

道教の神仙思想の中で重要視された楽器であり、日本本土には奈良時代に遣唐使によって伝えられたといわれている。以後は、北九州で発展した筑紫箏曲や、江戸時代初期には当道の八橋検校を創始者とする八橋琉球箏曲が興隆した。

### ② 「琉球箏」について

琉球箏(琉球箏曲)は、琉球王朝時代の18世紀初頭、当時王府の役人であった稲嶺盛淳が薩摩上りの際に、八橋検校の弟子であった薩摩藩士に箏曲を学び、1702年に尚貞王(11代目国王)の御前で演奏をしたのが始まりである<sup>(8)</sup>。琉球箏曲の曲種は、1) 本土伝来の楽曲と、2) 首里の宮廷で発展した琉球古典音楽の楽曲に大きく分けられる。1) 本土伝来の楽曲は、薩摩から伝来当時の10曲が現在でも伝承され、「段物」または「管攪(すががき)」と呼ばれる器楽曲7曲(「瀧落管攪」「地管攪」「江戸管攪」「拍子管攪」「佐武也管攪」「六段管攪」「七段管攪」と、「歌物」と呼ばれる、箏を伴奏とした声楽曲3曲(「船頭節」「対馬節」「源氏節」)が現存している。本授業の鑑賞教材として主に扱うのは、琉球箏曲の中でも最も演奏される頻度が高い、器楽曲の『瀧落管攪』とした。

前述の通り、琉球箏曲は八橋流箏曲の流れだと考えられている。しかしながら、日本本土の八橋流は、現在の二大流派である生田流や山田流に派生した後は衰退し、元々の八橋流の演奏法やその継承者は現存していない。音楽学者の田辺尚雄は、琉球箏曲で使われる楽曲や爪の形において八橋流との共通点が見られることから、本土で失われた箏曲が琉球の地にも現存している点について、非常に貴重な事例であると指摘している<sup>(9)</sup>。1972年に琉球箏曲は、沖縄県の県指定無形文化財に認定された。

### ③ 「伽倻琴(カヤグム)」について

今回、琉球箏と並び、鑑賞教材として扱うのが、韓国の伽倻琴で演奏される『沈香舞(チムヤンムー)』である。『三国史記』に依拠すれば、古代、伽倻国のカシル王が中国の箏に魅せられ伽倻の宮廷楽人であったウルクに製作を命じたのが契機である。新羅が伽倻へ侵攻し、伽倻が滅亡した後、ウルクは新羅の真興王のもとに仕え、伽倻琴を用いた音楽を発展させた<sup>(10)</sup>。現在も、伽倻琴は国楽(韓国の伝統音楽)に不可欠な楽器で、独奏や国楽オーケストラ(国楽の伝統楽器による西洋風な管弦楽)で用いられる他、現代の作曲家に

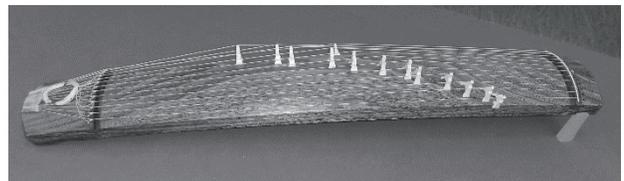
よる新たな創作曲も多く演奏される。楽器は大型の正楽伽倻琴(チョンアクカヤグム)と、18世紀に小型に改良された散調伽倻琴(サンジョカヤグム)があり、本授業で扱うのは後者である。

### (3) 「琉球箏」と「伽倻琴(カヤグム)」の比較

#### ① 「琉球箏」の構造及び奏法

上部の演奏面の長さは約6尺3寸(約178cm)で、緩やかなアーチを描き、厚さのある桐の一枚板が使われている。左右に張ってある13本の絃に、それぞれ可動式の柱(じ)を用いて、演奏する音階にあった音高に調節し、奏者の右手の親指、人差し指、中指に嵌めた爪によって絃をはじいて音を出す。基本的に右手で旋律を奏で、左手で装飾音を付ける。絃の材質は、本来、絹製であったが切れやすいため、現在はテトロン製が主流になっている。象牙製の爪の形も流派によって異なり、生田流は角爪と呼ばれ、トレモロ奏法を多用するために左右の先端が尖った四角い形をし、山田流は丸爪と呼ばれ、尖頭の丸形である。一方、琉球箏は、先端が丸みを帯びた曲線の爪を用い、各々の流派の奏法や求める音色によって、爪の形にも相違が見られる。また琉球箏は、箏に対して正面を向いて正座の姿勢で演奏される。

今回教材曲とした『瀧落管攪』では、「掃爪(ホーチヅイミ)」「割爪(ワイヅイミ)」「揺爪(ユイデル)」といった奏法が用いられている。こういった奏法により奏でられる『瀧落管攪』は、落ち着いた中にも華やかな印象がある楽曲となっている。



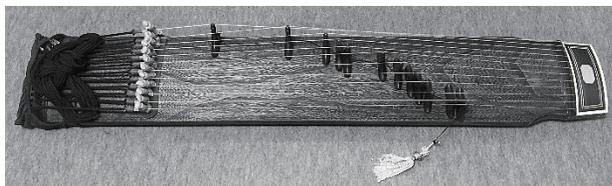
資料1 琉球箏

#### ② 「伽倻琴(カヤグム)」の構造及び奏法

材質は、日本の箏同様に桐の木を使用するが、厚みは薄く、絃は12弦である。絃の間隔も狭く、縦・横・厚み・重量の全てにおいて日本の箏より小さい。裏面には音穴が三つあり、太陽○・地球□・月☾を示している。12本の絹絃を右手の親指・人差し指・中指で摘んだり、弾いたりして音を出し、左手で柱の外側の絃を押さえることによって、音を装飾する。日本や中

国のように爪はつけない。調絃は、柱と裏面のトゥルゲと呼ばれるペグを回して行い、演奏者はあぐらの姿勢をとり、右膝の上に楽器の頭を載せ、音穴をふさがないように楽器の尾部を床に置いて演奏する。

今回取り上げた『沈香舞』は現代的な奏法を用いた楽曲であり、多彩な奏法から生み出される、華やかで迫力のある雰囲気の特徴の楽曲である。特に、右手で絃を弾き、左手でその絃を揺らす奏法で演奏される部分は、伽倻琴独特の音色が感じ取りやすい。これは、琉球箏の「揺爪(ユイゼル)」と類似した奏法であるが、そこから奏でられる音色の質が異なっているため、類似した奏法でも違う音色が生み出されることに気づくことで、楽器の構造と音色との関係性を理解しやすくなると考える。



資料2 伽倻琴(カヤグム)

#### (4) 音楽の特質を生かした対話型授業

音楽の要素や構造を知覚・感受し、音と音との関係性によって成り立つ「音(音楽)」の構造を読み取ることで、音楽活動における言語活動が充実し、対話を通して理解した知識を活用して音楽的な工夫ができるようになる。しかし、生徒一人ひとりが、自分の言葉で表現して伝え合わなければ対話は成立しない。音楽科における言語活動を成立させる為には、音楽科でいうところの知覚・感受をまず先におさえないといけない。音楽の諸要素を知覚し感受することで初めてそれぞれの曲の持つ特徴やよさを理解し、そこから自分の言葉として表現していくことができる。つまり、学習指導要領に示されている〔共通事項〕を意識することが、音楽科における言語活動の充実に活かされてくると考える。

今回の研究では、「音色」に着目して指導内容を焦点化し、琉球と韓国の音楽を比較鑑賞することによって、その国や地域の音楽の魅力を探っていけるように設定した。

## V 実践事例

### 1 音楽科における協調学習の実践の概要

- (1) 領域・・・鑑賞
- (2) 題材名・・・東アジアの箏の「音色」を知覚・感受し、それぞれの箏曲のよさを味わおう。
- (3) 対象・・・1学年
- (4) 教材・・・アジア諸民族の音楽  
琉球箏(沖縄):琉球箏曲『瀧落菅攪』  
伽倻琴(韓国):『沈香舞』  
その他東アジアの箏曲
- (5) 学習目標・・・  
比較鑑賞を通して東アジアの「音色」を知覚・感受し、それぞれの良さや味わいを人に伝える。
- (6) 指導内容
  - ① 素材としての音  
2つの箏の音そのものの質感を感じ取らせる。
  - ② 知覚→日本(沖縄)、韓国の箏曲を形づくっている要素・構造を知覚する。
  - ③ 感受→日本(沖縄)、韓国の箏曲を形づくっている要素・構造によって生み出される雰囲気・曲想を感受する。
  - ④ 音楽文化の理解→音楽の多様性に気づき、音楽と文化的・歴史的背景とのかかわりを理解する。
  - ⑤ 批評→音楽を形づくっている要素や構造などの客観的な理由をあげながら、生徒が価値判断したことを言葉で表す。
- (7) 学習活動

表1 単元計画(全5時間)

第1時	<p><b>「箏」について調べたことをまとめる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・箏曲の魅力の発見①</li> </ul> <p>日本・中国・韓国・琉球の箏曲を鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・箏について知る。</li> <li>・箏曲に触れる。</li> </ul>
第2時	<p><b>楽器に触れて各楽器の特徴を探す</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の箏曲の魅力の発見①でそれぞれが気づいたこと、感じたことや疑問点を全体で共有する。</li> <li>・琉球箏、伽倻琴の演奏を聴く。(ゲストティーチャーによる演奏)</li> <li>・箏曲の魅力の発見②</li> </ul> <p>各エキスパートグループに分かれ、「琉球</p>

	<p>箏」「伽倻琴」に実際に触れながら、楽器の特徴を探っていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲストティーチャーへのインタビューを通し、そこでわかったことをまとめていく。</li> <li>・次時に向けて、各エキスパートの役割を伝える。</li> </ul>
第3時 (本時)	<p><b>2つの箏の音楽の魅力を探す</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>箏曲の魅力の発見③</b></li> <li>・エキスパートA・B・Cのそれぞれの観点に着目しながら、琉球箏と伽倻琴の特徴を、各グループで調べていく。</li> <li>・ジグソー活動では、各エキスパート活動で知り得た情報を伝え合い、そこからさらに対話を通して、それぞれの箏の特徴について理解を深める。</li> </ul>
第4時	<p><b>2つの音楽の魅力について話し合う</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジグソー活動で共有したことをまとめながら、「琉球箏」「伽倻琴」のそれぞれの魅力について、「音色」に着目して話し合いを深めていく。</li> </ul>
第5時	<p><b>2つの音楽の魅力について発表する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジグソー活動で気づいたことや感じたことについて、対話を通して共有し、グループでまとめたことを発表する。</li> <li>・東アジアの箏曲の魅力について、各自の考えを批評文にまとめる。</li> </ul>

グループ内で交流する。エキスパートグループ内で交流したことを通して、琉球箏と伽倻琴についての一つの観点についての理解を深める。またそこから、自分たちが調べて分かったことや出てきた疑問について、他の観点（他のエキスパートの内容）とどのような関連があるのかについて関心を持ちながら、鑑賞していく活動を行う。

- ① エキスパートA : 奏法・楽譜・音楽的特徴  
 ② エキスパートB : 楽器の構造と音楽的特徴  
 ③ エキスパートC : 音楽文化と歴史との関係

表2 各エキスパートで調べる内容

A 奏法・楽譜 音楽的特徴	B 楽器の構造 と音楽的特徴	C 音楽文化と 歴史との関係
<ul style="list-style-type: none"> <li>・音色</li> <li>・爪（付け方）</li> <li>・奏法 (右手、左手)</li> <li>・楽譜</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音色</li> <li>・重さ、厚み、 長さ</li> <li>・音穴</li> <li>・絃の張り方と 張力</li> <li>・柱（並び方）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衣装</li> <li>・姿勢</li> <li>・ジャンルと 楽器編成</li> <li>・楽器に関する 歴史的背景</li> </ul>

## 2 各学習活動の内容

### (1) エキスパート活動

※前時（第2時）でのエキスパート活動

【箏曲の魅力の発見①】と題し、エキスパート活動への導入を行う。前時では、ゲストティーチャーによる琉球箏、伽倻琴の生演奏を聴き、演奏を聴いて気づいたこと、感じたことを自分なりにワークシートにまとめていく。

【箏曲の魅力の発見②】と題し、個々の感じた疑問点などをゲストティーチャーに質問し、新たな疑問（問い）に繋げる。

※本時（第3時）のエキスパート活動

【箏曲の魅力の発見③】と題し、琉球箏と伽倻琴の音色の特徴を知覚・感受し、下記の3つの観点に着目して、調べて知り得たことを基にエキスパートの

□各エキスパートの内容項目（ワークシート）

**エキスパート A** 「琉球箏」と「伽倻琴」の特徴の違いを生み出しているものは何か？比較しながら探ってみよう。

**どんな音色？**

絃をゆらすと、どんな音色がしたかな？  
実際に**絃をゆらす奏法**で弾いてみよう～！

〔琉球箏〕  
〔伽倻琴〕

**奏法**

〔琉球箏〕  
揺絃（ユイチル）  
→ 右手ではじいた直後に左手で押さえた絃を揺らす

〔伽倻琴〕  
→ 左手ではじいた直後に、右手でゆらす

**楽譜**

絃をゆらす奏法は、楽譜にはどのように書かれていますか？

〔琉球箏〕  
〔伽倻琴〕

Q. どうしてこういう奏法が生まれたのかな？  
(どんな音が好まれたのかな？)

**エキスパート B** 「琉球箏」と「伽倻琴」の特徴の違いを生み出しているものは何か？比較しながら探ってみよう。

**どんな音色？**

2つの箏は、それぞれどんな音色ですか？

〔琉球箏〕  
〔伽倻琴〕

**柱(じ)**

柱の違いは？

〔琉球箏〕  
〔伽倻琴〕

**音穴**

音穴の違いは？

〔琉球箏〕  
〔伽倻琴〕

Q. 柱や音穴の違いなどが、2つの箏の音色の響きの違いとどう関わっていると思いますか？

**エキスパート C** 「琉球箏」と「伽倻琴」の特徴の違いを生み出しているものは何か？比較しながら探ってみよう。

**衣装**

どんな衣装で演奏していますか？

〔琉球箏〕  
〔伽倻琴〕

**姿勢**

どのような姿勢で弾いていますか？

〔琉球箏〕  
〔伽倻琴〕

衣装や姿勢の違いは音の出し方と関係ある？

**共通点や相違点**

どのようなジャンルで演奏していますか？

〔琉球箏〕  
〔伽倻琴〕

Q. 同じ中国がルーツなのに、どうして違いが生まれたのかな？



図1 エキスパートA（音色・奏法の確認）

エキスパートAでは、演奏されている映像を視聴しながら、実際に演奏することを通して、奏法と音色との関連をつかんでいく。



図2 エキスパートB（楽器の構造の確認）

エキスパートBでは、2つの箏の構造を探るために、様々な角度からその特徴を調べていく。2つの箏の構造の違いを調べることで、楽器の構造と音色との関連について考えていく。



図3 エキスパートC（歴史的背景の確認）

エキスパートCでは、2つの箏の歴史的背景に関する資料を読み、さらに様々なジャンルの演奏を視聴することを通して、どうしてこのような楽器や音楽が生み出されてきたのか、その背景と音楽とを関連づけて探っていく。

## （2）ジグソー活動

琉球箏と伽倻琴の奏でる音楽の雰囲気の違いや、2つの音楽の魅力を探るために、「音色」の違いに焦点をおく。音色や音楽の雰囲気の違いを生み出す要因について、気づいたことや感じたことを、対話を通して共有する。さらに各エキスパート活動で得た奏法や、楽器の構造、文化的・歴史的背景についての情報を統合して、2つの音楽の魅力についてまとめる。



図4 ジグソー活動の様子（伽倻琴）

図4は、エキスパートAの生徒が弦をはじきながら奏法を伝え、エキスパートBやCの生徒がその奏法を模倣し、音色を確認し合っている様子である。

## （3）クロストーク活動

ジグソー活動を通して気づいたことや感じたことについて、対話を通して共有し、グループでまとめたことを発表することによって、さらに深い音楽理解へと繋げていけるようにする。また、琉球箏と伽倻琴による各箏曲の魅力について、「個」の考えを批評文にまとめていけるようにする。



図5 クロストーク活動



図6 クロストーク（各グループの発表場面）

### 3 授業前後の生徒の変容

ここでは、特に変化を感じることができた生徒の様子を記す。(生徒のワークシートより抜粋)

※下線部の示し方

知覚 (知覚)、感受 (感受)、価値付け (価値付け)、期待する解の要素 (①琉球箏と伽倻琴の奏法と音色との関連に気づく) (②琉球箏と伽倻琴の楽器の構造と音色との関連に気づく) (③琉球箏と伽倻琴の文化的・歴史的背景と音楽との関連に気づく)、思考・思考の深まり (思考・思考の深まり)

【生徒A】

(授業前)

エキスパートAの生徒

・伽倻琴は「中国」っていう感じがあって、琉球箏は「沖縄」って感じがあった。

↓

(授業後)

・伽倻琴は、音が低くて響きのある音色が出せます。また①絃をゆらす奏法で弾くと、音が一定の音で長く続いている特徴があります。①楽譜には記号や音符などで書かれており、②音穴が一つしかありません。また②柱は琉球箏より音が低い違いがあります。僕は、「ガサガサ～」とするところが好きで、音が低く速くなっているところが気に入ったからです。

・琉球箏は、音が高くて響きのある音色を出すことができます。また①絃をゆらす奏法で弾くと音が少しふるえる音がでるのが特徴です。②柱が白くて音穴が二つ、前後にあります。琉球箏の③代表的な歌は、「瀧落管攪」という歌があり、一番高くなる部分が好きで、理由は音がとても高く響いていて聴いていると気持ちが良くなる感じがあるからです。

・③琉球箏は、中国→日本→琉球の順に伝わり、伽倻琴は中国のものだったものが韓国の人がそれを参考に作ったので、伝わり方の違いによって発展の仕方が変わった。

生徒Aは、授業前は曲想についてのみ言及しているために、感受に関する記述のみであったが、授業後は、期待する解の3つの要素が含まれ、音色に対する知覚と感受が関連するようになり、音楽的根拠をもって自らの価値付けが伝わるように説明できるようになるという変化が見られた。特に生徒Aは、知覚・感受した音色の特質が奏法と関連していることをよく捉えていることが分かる。

【生徒B】

(授業前)

エキスパートBの生徒

・琉球箏は、なめらかで響いている感じで伽倻琴は、独特なリズム。

↓

(授業後)

・伽倻琴は、③中国を参考に韓国人が作りました。②絃の張り具合は少しゆるく、太さも太いので、低い音が出ます。音の音色はあまり響かず、ヴォーン (～) という感じがします。伽倻琴は、①爪をつけないで、自分の指で弾きます。伽倻琴を使った曲は、独特のリズムで不思議な感じがします、自分の爪で1、2本の絃をこすると、おもしろい音の強弱になるので気に入りました。

・琉球箏は、③中国→日本→琉球というルートでできました。日本の文化も入ったため、少し伽倻琴とは違って、なめらかでヴォーンと音色が響いています。琉球箏は②絃が強く張られているので高い音が出ます。琉球箏曲で①ファからドまで順番に弾くところが、とてもなめらかできれいで気持ちがやすらぐので気に入りました。

・③伽倻琴は韓国人がつくり、琉球箏は、中国→日本→琉球のルートできたので、日本独自の文化も取り入れられ、絃の数や太さ、柱、音穴の形や数が異なった。

授業前の生徒Bの記述には、知覚と感受を関連させて捉えるようなものは見られなかったが、授業後には期待する解3つの要素全てが含まれ、音色に対する知

覚と感受が関連するようになり、音楽的根拠をもって自らの価値付けが伝わるように説明することができるようになった。特に、音色に対して知覚・感受したことと楽器の構造とを関連させて捉えており、そこから思考が発展していつていることが分かる。

### 【生徒C】

(授業前)

エキスパートAの生徒

・伽倻琴は響きが独特で、お祭りみたいな雰囲気、琉球箏は、なめらかで落ち着いた雰囲気。

↓

(授業後)

・伽倻琴は、低音で力強い感じで、②音穴が、○や  
ㇿ などいろいろな小さな形をしているため、太鼓  
のような特徴的な音色にも聞こえます。伽倻琴の箏  
曲は、祭りのような賑やかな雰囲気です。後からく  
る波のあるエコーが印象的で気に入りました。

・琉球箏は、少し低音のようで、なめらかな感じだ  
けど、②音穴が大きいためよく響きます。琉球箏の  
箏曲は、正月のような落ち着いた雰囲気です。①少  
し波のある部分が気持ちが穏やかになるようで気に入  
りました。

・伽倻琴は韓国の③伽倻国の人々が中国の箏の真似  
をし、波のあるお祭りのような雰囲気が好きで作り、  
琉球箏は、③中国から日本へ、日本から琉球へ来て、  
琉球の人々は、なめらかで落ち着いた雰囲気が好き  
なため作ったと思います。結果、同じ中国だけれど  
も、その国の文化が違えば好みも違うため、曲もそ  
の雰囲気に合わせた曲を作っているため違うのだと  
思います。

生徒Cも生徒Aと同様、授業前は、曲想についての感受に関する記述のみだったが、授業後は3つの期待する解の要素が含まれ、音色に対する知覚と感受とが関連するようになり、音楽的根拠をもって自らの価値付けが伝わるように説明している。そして、2つの箏曲に対して知覚・感受したことを根拠に、それぞれの箏や箏曲の成り立ちについての考えを深めていくよう

になる、という変化が見られた。

このように生徒の授業前後の変化や、期待する解の要素の比較を通してみると、授業前は、感受のみであったり、知覚と感受とを関連させて答えることができていなかったりしていた。また、そのほとんどの記述は、曲想に対する感受に関するものに限られていた。しかしながら、2つの箏や箏曲をどのようなねらいで鑑賞するかを明確にし、音色に焦点化して比較鑑賞することを通して、生徒の理解は確実に深まっていった。さらに、各エキスパートの考えを知ることによって、様々な側面から2つの箏や箏曲の違いや共通点を捉えることができた。そして、奏法と音色との関連付け、楽器の構造と音色との関連付け、文化的・歴史的背景と音楽との関係に気づくことで、期待する解の要素が予想以上に、具体的な解として表現されるようになった。

## VI 成果と課題

### 1 「個」の音楽理解の深まり

今回の研究では、「個」の音楽理解を深める授業づくりをテーマに掲げて授業を展開してきたが、東アジアの箏に関して生徒の興味や関心が向かう音楽的内容(今回は音色)を学習の核としたことで、2つの箏の音色の特質を捉えることができた。特に伽倻琴の音色を聴いた瞬間、生徒たちは一瞬にして表情を変え、興味深げに耳を傾ける姿を見せた。それは、伽倻琴の音色が、聴き馴染んだ琉球箏とは全く違うものとして受け止められていた姿と言える。このような、伽倻琴から発せられる独特の音の響きに出合うことで、「これは一体何だ」といったような興味が喚起され、一気に箏の音色に関心が向かっていったのである。

そうして箏の音色に関心が向かうことで、その後のエキスパート活動・ジグソー活動・クロストークにおいても、何故このような音がするのか、何故このような音を好んだのか、といった問いにつながっていった。また、琉球箏と比較することで、共通点の多さも際立った。同じような構造を多く持つにも関わらず、音楽の雰囲気は全く異なっている。そこにはどのような要因があるのか、といった疑問が先の問いとつながることで、2つの箏の音色の特質がどのような要因によって生み出されてきたのかという疑問を、奏法や楽器の構造、文化的・歴史的背景などから探って解決してい

こうとする探求的な学習へと発展していく。そして、生徒自ら探求していく意欲を持つことで、主体的に他者と対話し、学びを拡げていく姿へとつながっていったと考えられる。

では、何故生徒の間に対話が生まれたのか。それは、それぞれのエキスパート活動において、ただ「知る」ことで終わるのではなく、エキスパート活動を通して知識を得ることで、また新たな疑問へとつなげられるような問いを設定したところにあるだろう。例えば、エキスパートA（奏法）の活動をしていた生徒は、グループ内での交流において、「どうしてこういう奏法が生まれたのか？（どんな音が好まれたのか?）」を考えていく際に、「何故だろう?」と頭を悩ましていた。その時に、ある生徒が「王様に関係があるんじゃないか」と発言したことをきっかけに個々の発言が活発となり、琉球箏や伽倻琴やその音楽が作られてきた経緯についても関心を示すようになった。しかし、楽器の歴史についての情報を自分たちは持っていないので、その情報を持っていると思われるエキスパートCの生徒との交流を心待ちにする様子を見せていた。この時、一つの対話が生まれ、また新たな対話への期待が生まれたと言える。

ここで最初に生まれた対話は、同じエキスパート内での対話である。実際に演奏する経験を共有していたエキスパートAの生徒は、箏の音色の質をしっかりと捉え、それを擬音語で伝え合うなどして、「奏法」という観点から箏や箏曲への理解を深めていった。そしてある意味では、奏法について学ぶ活動だけで満足もしていた。しかし、そこに新たな問いを出されたことで、自分たちが知覚・感受した箏の音色を、新たな観点から見つめ直さなければいけない状況が生まれた。この状況を打開するために、互いに色々なアイデアを出し合い、納得のいく答えを模索し始めた。そこである生徒の発言をきっかけに、箏の歴史的背景まで思考が拡がり、対話が活性化されたと考えられる。そして、この思考の拡がりによって、二つ目の新たな対話、ここでは別のエキスパート活動をしていた生徒との対話への期待が生まれていったのである。

このように、一つの疑問が解決され、また新たな疑問が生じる中で、それを他者との対話を通して解決しようと思える過程において、個々の音楽理解も深まっていったのではないかと考える。

また、生徒の興味・関心が向かう音楽的内容を核とする時に、その音楽的内容（今回で言えば音色）を体験的にしっかりと味わうことの成果も見えてきた。特にエキスパートA、Bグループの担当になった生徒は、楽器を鳴らすという経験を多くしていた。それにより、箏という楽器（モノ）との対話が充分に行われていたと考える。実際に楽器を鳴らすことで、絃の張り具合や揺れといった、弾いた時に伝わる感触を体感するとともに、弾いたと同時にフィードバックされる音色があるので、その質感を身体を通して捉えていくことができる。奏法による音色の質は、実際に音響としての音を鳴り響かせないと伝わらない部分が多い。実際に楽器を弾いてみて得られた多くの情報は、「言葉」だけでは伝えられないものを多く含んでいるのである。つまり、生徒が箏の音色の特質を深く捉えることができたのは、このような楽器（モノ）との対話が充分に行われていたからではないかと考える。

## 2 実践から見えてきた課題

### (1) 授業デザイン上の問題点

今回、授業をデザインするにあたり、発問とねらいを焦点化し、問いを具体的なものにすることの大切さが見えてきた。例えば、提示する資料においても何に注目して学んでいくかを明確にし、生徒が学習活動の見通しを持てるようにする必要がある。さらにねらいと生徒の活動が繋がっていないことが見えたので、活動と活動の連続性が見えるものにしていかなくてはならないことが見えてきた。

### (2) 課題や資料の提示方法の工夫

課題や資料の提示については、音楽科の特性に合わせた工夫が必要であることが見えてきた。例えば、各エキスパート活動において、エキスパートA、Bは直接楽器に触れることができる活動であるが、エキスパートCは、全く楽器に触れずに、活動を進めていくので、Cの生徒は楽器を鳴らすという経験が、A、Bの生徒に比べて少ないという状況があった。楽器に直接触れる時間が長いということは、成果にも挙げた楽器（モノ）との対話を保障するということになる。楽器に触れることでしか得られない質的な情報が、音楽的な気づきを促す上でも重要なものとなる。そのため、このような授業では、全ての生徒が直接的に楽器に触れるだけでなく、その時間を保証するような環境構成の工夫が必要なものが見えてきた。

さらに、ジグソー活動になった時に、エキスパート活動A、Bの生徒は、自分たちが調べてきたことを説明しながら対話していくために、楽器を用いる必要が出てきた。それは、実際に鳴らしてみることではか伝えられない情報が多かったためだと考えられる。例えば、言葉での説明と音そのものを使った説明とでは、その理解の度合いに、大きな差が生じたりする。特に音楽科では、音そのものから感じる情報をもっとも大事となってくるからである。しかしその結果、どのグループにも楽器が必要となってしまった。実際に生徒が実演することを可能にするような環境設定も必要ではあるが、これは楽器の数などの問題と合わせて、今後考えていかなければならないと感じる部分である。

さらに、A、B、Cの繋がりを意識させ、2つの箏や箏曲の音色について考えさせ、深まりを見いださせる手立てや発問の仕方の工夫が必要だと感じた。今回は、ワークシートや掲示物を用いて、エキスパート活動で何について取り組んでいくのかを明示し、かつ調べたり体験したりして分かったことをつなげていくような問いを設定するという工夫を行った。しかし、エキスパート活動からジグソー活動へと移行した際に、それぞれが得てきた知識が他のエキスパート活動の生徒が持っている知識とどう関連していくのかの見通しを持ってない生徒の姿も見られた。生徒自身が、知識間のつながりを見出すことに意義があるのだが、生徒の実態や学習の流れに応じて、それぞれの知識を関連づけて統合していけるように、ある程度の見通しを教師側から提示することも重要であると感じた。そのためには、エキスパート間の関連を視覚化して示すなどの手立ては有効ではないかと考える。

### (3) 授業中の支援や学習内容の厳選に関して

生徒の関心を学習内容に向かわせ、思考を発展させていくためには、教師側の綿密な計画と、資料の内容の吟味、ワークシートの内容の検討（特にワークシートは、各活動との繋がりを含めたもの）、声かけの支援の大切さも重要な課題の一つだと考える。さらに限られた年間授業時数の中で、1つの単元にかけられる時間はおよそ決まっているが、ジグソー活動とクロストーク活動に関しては、さらにもう1時間授業展開することができれば、より深まって音楽理解に繋がると考える。しかし限られた時間の中でどのように展開していくか授業の中味の吟味も大変重要である。

以上、授業デザイン上の問題点や、課題や資料の提示方法、また、授業中の支援に関すること全てにおいて、協調学習を進める分野の検討、資料の作成、中味の吟味といった綿密な授業計画が大切であることがわかった。

### 〔参考文献〕

- (1) 国立教育政策研究所『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の教育原理』2013年
- (2) ベネッセ教育総合研究所『小中学生の学びに関する実態調査 速報版』2014年
- (3) 旺文社教育情報センター『教育における“コンピテンシー”について』2005年
- (4) 秋田喜代美編『対話が生まれる教室—居場所感と夢中を保護する授業—』教育開発研究所2014年
- (5) 琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第26集、2013年、p.3-4
- (6) 同上、p.5-6
- (7) 文部科学省『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社、平成20年9月
- (8) 世礼國男「序」『琉球箏曲工工四上巻』箏曲興陽会、1974年
- (9) 同上
- (10) 植村幸生『韓国音楽探検』音楽之友社、1998年、p.17